

「川がつなぐひと・もの・ゆめ

～from ヨーロッパ toやまがた～」

第一部 山形県の世界遺産登録へ向けた取り組みや、昨年12月に文化庁へ提出された提案書のコンセプトについて、山形県世界遺産推進室よりお招きした2名の講師の方々に解説をいただきました。

お一人目の渡部泰山室長には、「**世界遺産を目指す意味と価値**」というタイトルで、われわれの生活を支えてきた身近な自然の偉大さ、郷土に育まれる人間愛、そしてそれらを子どもたちへ継承することの尊さの再認識等、世界遺産への取り組みがもたらす様々な意義についてお話いただきました。

また、一河川の流域全体という広域にまたがる資産構成での提案の独自性を強調したほか、提案までの何年にもおよぶ道のりを紹介。最上川と密接に関わる重要資産として位置づけた出羽三山に自ら「わらじ」で詣でたエピソードなどを交え、会場を惹きつけておられました。



お二人目の山口博之主査は、渡部室長の熱弁を受け「**世界遺産の提案コンセプトの方向性**」と題し、最上川流域を彩る多くの資産についてその位置や特色を映像で紹介。松尾芭蕉や齋藤茂吉にも詠まれた最上川そのものはもちろん、山形県の花「紅花」の栽培地や、かつて「亀の尾」を育み現在もなお下流域に広がる稲作地等、川の流れの賜物としての景観を評価。美しい山形・最上川フォーラム副会長である米沢中央高校の佐藤五郎先生により、その様子が解き明かされた白鷹町周辺の「舟道」の遺構についてもご解説をいただき、皆さんますます興味深く聞き入っている様子でした。

さらに、現存する「川絵図」が全国でも例のないほど質・点数ともに充実していることや、出羽三山・鳥海山への信仰が人々の精神を支えると同時に川を守ってきたことを指摘した上で、川と人々との関係がいかに密で重要なものであったかを示され、「最上川の文化的景観」という提案が、現代において希薄になりがちな人と川の関係性を、良好に保持するためにも有益であると述べられました。

第二部 広島大学で地理学、観光学について研究されているフंक・カロリン先生に「**世界遺産、観光と地域：日本とドイツの事例から**」というタイトルでご講演いただきました。

流暢な日本語と数多くの映像により、故郷ドイツはもちろん、地球中の世界遺産の現状や選定時のポイントについて専門的な着眼点で解説いただきました。

また、日本での中心的なフィールドである広島県宮島や近年世界遺産に登録された島根県石見銀山など中国地方の世界遺産を例に挙げ、提案から登録までの道のりや登録後の苦勞・工夫について、最上川を軸とする世界遺産への提案とも比較しながら分かりやすくお話いただきました。



さらに後半では、専門である観光にも触れ「持続可能な観光」をキーワードに、世界遺産登録がもたらす「ブーム」をいかに継続するかという点について具体例を交え解説。「利用客はもちろん、地域住民がいかに楽しむか」「自然環境の美しさや資産の持つ魅力をどう工夫し保護していくか」といった課題に対し、総合的な保護の為にルール必要性や、架橋建設計画や地域経済など人間の实生活とのバランス、といったポイントを示されました。

講演会を終え、地元白鷹町から参加の男性 A さんは「普段はなかなか聞く機会のない話だったが、分かりやすく心に入ってきた。これから(最上川沿いの地域住民として)頑張ろうと思う。」と充実した表情。

私たち観衆一人ひとりが、県内に世界遺産を持つことのメリットや課題、そしてそれを乗り越え「持続可能」なものとなったとき、はじめて謳歌を許される素晴しさや誇り、そんなイメージを抱くことが出来たのではないのでしょうか。

多大なご協力をいただきました講師の先生方、ご参加いただいた皆様、スタッフの皆様、ご共催をいただいた白鷹町の皆様、誠にありがとうございました。

—おわり—